

2. 事業の概要と成果							
(1) 上位目標の達成度	本事業が上位目標に据えた「住民主体による包括的な地域開発活動モデルの確立」は概ね達成されつつある。その背景には、本事業期間中（1年次）に発生した大地震の後の復興に向けたコミュニティ内外の公助・自助努力、20年ぶりの地方統一選挙による新首長の選出ならびに地方分権化の促進などの貢献要因が存在していたと考える。これらの要因が、住民たちの社会の動向や地元の開発に対する関心を高め、地域の生活改善を目的とした本事業への積極的な行動につながったと考える。 本事業の実施期間を通じて、住民リーダーたちはリーダーシップを発揮し、地域住民の声を取りまとめ、地方行政に対して意見を述べたり、要望を申し入れたりするなど、農業や給配水分野の生活改善に必要な技術向上を支える基礎能力の向上を裏付ける行動の変化が確認された。 当法人は、本事業終了後も、近隣地域における活動を継続するという利点を生かし、今後必要に応じて本事業対象地域を訪問し、さらなる生活改善を目指す住民間の連携と協力を促進し、状況の変化に合わせた地域開発が住民の手によって進められるようフォローアップしていきたい。						
(2) 事業内容	<u>活動1：生活向上のための支援</u> (1) 農作物栽培研修 換金作物栽培の技術向上を目的に、対象農家（全120世帯）に対し農作物栽培ならびに関連技術を指導した。具体的には、本事業対象地の気候と耕作期（本事業期間中は以下の通り3回の栽培サイクル）に合わせ、日本人農業専門家や本事業スタッフによる技術研修を開催した他、対象農家を巡回モニタリングしながら個別指導した。なお、試験田圃の管理運営面では、本事業対象地を管轄する郡農業局所属の青年海外協力隊員から協力を得た。各栽培サイクルにおける技術指導の詳細については以下の通りである。 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>技術指導内容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td> 第1サイクル 2016年5月～9月 <u>対象農家：120世帯</u> </td><td> (ア) 栽培作物 - トマト（ビニールテントの使用を推奨）、キャベツ、トウガラシ（対象地域の地理的条件、対象農家の意向、及び市場の動向などに鑑みて、農家自身が選択） (イ) 技術指導内容 - 各栽培作物の生育ステージ（苗床、移植、追肥、灌水、収穫）に沿って技術指導した。 - 化学肥料や農薬の使用を減らすため、家畜や人のし尿を利用した液肥の作成・活用を推奨した。 (ウ) 成果 - 栽培サイクル1を通じて、研修受講120世帯の内116世帯（トマト：14世帯、キャベツ：40世帯、トウガラシ：62世帯）が栽培活動を実践し、42世帯が収穫作物を販売した。販売した作物の内訳は、トマト（計1,084Kg、43,360NPR）、キャベツ（計6,730Kg、149,100NPR）、トウガラシ（計1,583Kg、65,720NPR）である。 </td></tr> <tr> <td> 第2サイクル 2016年12月～ 2017年3月 <u>対象農家：38世帯</u> </td><td> (ア) 栽培作物 - ビーマン、ニンジン、ズッキーニ、ブロッコリー、トマトのうち、土壌の状態、地理的条件などに鑑み1世帯が2種類を選択。なおトマト栽培を選択した農家には、本事業からビニールハウス設置資材を供与した。 - 同時期、震災被災世帯の家屋再建に向けた政府補助金が支給され、多くの農家が家屋再建作業に従事していたことから、研修に参加する農家数が減少した。 (イ) 技術指導内容 日本人農業専門家を投入し、以下の栽培技術を指導した。 【ぼかし肥料】 - 対象地域では従来、元肥として家畜（水牛）の堆肥を、追肥として尿素を使用しているが、堆肥は牛糞を蓄積しただけの未完熟な状態で使われており、本来の肥料としての効果が十分に得られていない状況であった。また、特定の養分だけを追肥していることにより、土壌成分に偏りが生じ、作物の生育に支障をきたしている可能性が、日本人農業専門家により指摘された。 - この状況を踏まえ、堆肥と土、草などを混ぜて発酵させる「ぼかし肥料」技術を指導し、土壌の改善を図った。ぼかし肥料は、2週間から1ヶ月程度で完熟 </td></tr> </tbody> </table>		技術指導内容	第1サイクル 2016年5月～9月 <u>対象農家：120世帯</u>	(ア) 栽培作物 - トマト（ビニールテントの使用を推奨）、キャベツ、トウガラシ（対象地域の地理的条件、対象農家の意向、及び市場の動向などに鑑みて、農家自身が選択） (イ) 技術指導内容 - 各栽培作物の生育ステージ（苗床、移植、追肥、灌水、収穫）に沿って技術指導した。 - 化学肥料や農薬の使用を減らすため、家畜や人のし尿を利用した液肥の作成・活用を推奨した。 (ウ) 成果 - 栽培サイクル1を通じて、研修受講120世帯の内116世帯（トマト：14世帯、キャベツ：40世帯、トウガラシ：62世帯）が栽培活動を実践し、42世帯が収穫作物を販売した。販売した作物の内訳は、トマト（計1,084Kg、43,360NPR）、キャベツ（計6,730Kg、149,100NPR）、トウガラシ（計1,583Kg、65,720NPR）である。	第2サイクル 2016年12月～ 2017年3月 <u>対象農家：38世帯</u>	(ア) 栽培作物 - ビーマン、ニンジン、ズッキーニ、ブロッコリー、トマトのうち、土壌の状態、地理的条件などに鑑み1世帯が2種類を選択。なおトマト栽培を選択した農家には、本事業からビニールハウス設置資材を供与した。 - 同時期、震災被災世帯の家屋再建に向けた政府補助金が支給され、多くの農家が家屋再建作業に従事していたことから、研修に参加する農家数が減少した。 (イ) 技術指導内容 日本人農業専門家を投入し、以下の栽培技術を指導した。 【ぼかし肥料】 - 対象地域では従来、元肥として家畜（水牛）の堆肥を、追肥として尿素を使用しているが、堆肥は牛糞を蓄積しただけの未完熟な状態で使われており、本来の肥料としての効果が十分に得られていない状況であった。また、特定の養分だけを追肥していることにより、土壌成分に偏りが生じ、作物の生育に支障をきたしている可能性が、日本人農業専門家により指摘された。 - この状況を踏まえ、堆肥と土、草などを混ぜて発酵させる「ぼかし肥料」技術を指導し、土壌の改善を図った。ぼかし肥料は、2週間から1ヶ月程度で完熟
	技術指導内容						
第1サイクル 2016年5月～9月 <u>対象農家：120世帯</u>	(ア) 栽培作物 - トマト（ビニールテントの使用を推奨）、キャベツ、トウガラシ（対象地域の地理的条件、対象農家の意向、及び市場の動向などに鑑みて、農家自身が選択） (イ) 技術指導内容 - 各栽培作物の生育ステージ（苗床、移植、追肥、灌水、収穫）に沿って技術指導した。 - 化学肥料や農薬の使用を減らすため、家畜や人のし尿を利用した液肥の作成・活用を推奨した。 (ウ) 成果 - 栽培サイクル1を通じて、研修受講120世帯の内116世帯（トマト：14世帯、キャベツ：40世帯、トウガラシ：62世帯）が栽培活動を実践し、42世帯が収穫作物を販売した。販売した作物の内訳は、トマト（計1,084Kg、43,360NPR）、キャベツ（計6,730Kg、149,100NPR）、トウガラシ（計1,583Kg、65,720NPR）である。						
第2サイクル 2016年12月～ 2017年3月 <u>対象農家：38世帯</u>	(ア) 栽培作物 - ビーマン、ニンジン、ズッキーニ、ブロッコリー、トマトのうち、土壌の状態、地理的条件などに鑑み1世帯が2種類を選択。なおトマト栽培を選択した農家には、本事業からビニールハウス設置資材を供与した。 - 同時期、震災被災世帯の家屋再建に向けた政府補助金が支給され、多くの農家が家屋再建作業に従事していたことから、研修に参加する農家数が減少した。 (イ) 技術指導内容 日本人農業専門家を投入し、以下の栽培技術を指導した。 【ぼかし肥料】 - 対象地域では従来、元肥として家畜（水牛）の堆肥を、追肥として尿素を使用しているが、堆肥は牛糞を蓄積しただけの未完熟な状態で使われており、本来の肥料としての効果が十分に得られていない状況であった。また、特定の養分だけを追肥していることにより、土壌成分に偏りが生じ、作物の生育に支障をきたしている可能性が、日本人農業専門家により指摘された。 - この状況を踏まえ、堆肥と土、草などを混ぜて発酵させる「ぼかし肥料」技術を指導し、土壌の改善を図った。ぼかし肥料は、2週間から1ヶ月程度で完熟						

		することや、地域で安価に或いは無料で入手できる材料（特に、対象地域の主要民族であるタマン族は、家庭で地酒を醸造するため、醸造後の残留物を発酵菌として用いることが可能）で作ることできるなど、農家が取り組みやすい技術であり、幅広く普及した。 【等高線畝立て】 - 丘陵地に位置する本事業対象地では、畑が斜面に位置しており、土壌が流出することで農業生産性が低下している点が、日本人農業専門家により指摘された。 - この状況を踏まえ、「A フレーム」という道具を使って土壌の水平を測り、等高線に沿って石垣を設置し、また石垣に沿って植物を植えることで土壌流出を防ぐ技術を指導した。 【寒冷期栽培】 - 本事業対象地の標高は 1,000m を超えており、一般的に寒冷期の野菜栽培は不可能であると理解されていた。 - その為、寒冷期にあたる第 2 サイクルでは、寒冷期の野菜栽培技術として、苗床をビニールシートで覆うこと、また四方を囲うビニールハウス（従来は屋根の部分の覆うだけのタイプであった）を導入することなどを指導した。なお本事業からは、ビニールハウス建設資材（ビニール、接合資材）を供与し、骨組みに使う竹と労働力は受益者負担（総コストの約 20% 相当）とした。 【農家スタディツアー】 - 農家対象のスタディツアーを開催し、16 世帯の農家が、カトマンズ市内の有機栽培作物を販売する市場や有機栽培農園を視察し、栽培技術やマーケットに関する学びを得た。 (ウ) 成果 - 研修受講 38 世帯の内、37 世帯（トマト：20 世帯、ズッキーニ：10 世帯、ニンジン：7 世帯、ピーマン：19 世帯、ブロッコリー：8 世帯）が 2 種類の作物を栽培した。同サイクルでは、順調に生育していたものの収穫間際に雹の被害に遭い、収穫物を販売できたのは 3 世帯に留まった。同 3 世帯の内 2 世帯はブロッコリー（計 1,200kg、42,000NPR）、1 世帯はトマト（220kg、8,800NPR）を販売した。
第 3 サイクル 2017 年 5 月～9 月 対象農家：58 世帯	(ア) 栽培作物 トマト（ビニールテント使用）、ブロッコリー、カリフラワー (イ) 技術指導内容 【土壌分析とぼかし肥料のフォローアップ】 - 対象全世帯の土壌 pH、及び NPK（窒素、リン酸、カリウム）の数値を調べ、土壌状態を分析した。 - 土壌分析の結果を踏まえ、ぼかし肥料を作る際に混ぜるとよい物質（特定の木の葉、灰、米ぬかなど）について指導した。 【減農薬栽培】 - フェロモントラップという防虫装置を用いたり、「コンパニオンプランツ（異なる種類の作物を同じ畑に植えて病害虫を防ぐ手法）」を取り入れたりする減農薬栽培技術を指導した。 【ビニールテント/ハウスのフォローアップ】 - トマトは雨に弱い作物であるが、雨期に当たった本サイクルは、ビニールテントの使用を推奨し、ビニールシートと接合資材を供与した。同テントは、寒冷期には四方を囲うハウスとしても使用することが可能になっている。 【ビジネスプラン】 - 過去 2 回の栽培サイクルを通じて、「自分で栽培・収穫した農作物を販売し、現金を得る」経験をした農家が出てきたことから、農作物栽培に係る投入と売り上げを事前に試算し、純利益の見込みを立ててから栽培に取り組めるよう、収益計算（ビジネスプラン）方法について指導した。 (ウ) 成果 - 研修受講 58 世帯の内 57 世帯（トマト：22 世帯、ブロッコリー：25 世帯、カリフラワー：10 世帯）が栽培活動を実践し、21 世帯が収穫物を販売することを経験することができた。同 21 世帯の内、9 世帯がトマト（810kg、40,500NPR）、7 世帯がブロッコリー（169kg、10,140NPR）、5 世帯がカリフラワー（30kg、1,500NPR）を販売した。 - 栽培サイクル 2～3 を通じ、20 世帯がビニールテント/ハウスを設置し、使用することを開始した。 - 栽培サイクル 2～3 で栽培した延べ 93 世帯でぼかし肥料が普及し、各農家で継続的に作成・利用された他、研修受講世帯以外にも普及していることが確認された。	

(2) 組合活動促進

- 既存の農業組合メンバー、及び農作物栽培技術研修を受講した農家を対象に、流通とマーケットに関する研修を実施した。研修では、生産者から消費者までの流通プロセス、市場価格の決定方法、ならびに高く売するために必要な農作物の処理方法などについて指導した。
- 農作物栽培技術研修を受講した農家が、農業グループとして行政に登録する際の手続き（書類確認など）を、本事業から側面支援した。

(3) 家畜飼育研修

- 農家 48 世帯に対して、家畜（ヤギ、水牛）の順調な生育に必要な飼料や飼育環境に関する研修を実施した他、飼料として有効な牧草の苗を配布し、家屋や畑の周辺に植える活動を行った。牧草栽培は家畜飼料の増産だけでなく、土壌流出防止の効果にもつながった。
- 家畜の改良小屋に関する研修を実施し、飼料と糞尿が混ざることなく衛生的な環境を維持する方法を指導した。本事業期間中、11 世帯が改良家畜小屋を導入し、建設が完了した。

活動 2：水へのアクセス改善のための支援

(1) 水供給設備の設置

本事業対象地の 5～7 区において、以下の通り水供給設備設置を支援した。同設備建設は、本事業から施工業者に委託するのではなく、本事業スタッフ（エンジニア）監督のもとで、地域住民が全ての施工作業を担った。これにより、地域住民は建設技術に加え、物資調達、資金管理や施工管理など、多岐にわたる知識や技術を身につけることができた。

(1) 水供給設備建設（5 区および 7 区）	(2) 水供給設備建設（6 区）
建設内容（1, 2 年次含む） - 建設期間：2015 年 12 月末～2017 年 5 月 - 対象：計 10 集落（55 世帯） - 取水装置：7 基（7 ケ所） - 集水樹：5 基 - 分水槽：2 基 - 貯水タンク：（6,000ℓ：2 基、4,000ℓ：5 基、2,000ℓ：4 基） - 水道栓：18 ケ所 - 配水パイプ総距離：12,035m - 増水量：250ℓ/日/世帯 - 灌水可能面積：1,250 m²	建設内容（2 年次のみ） - 建設期間：2016 年 10 月～2017 年 5 月 - 対象：計 4 集落（35 世帯） - 取水装置：2 か所 - 集水樹： - 分水槽：1 基 - 貯水タンク：（12,000ℓ：1 基、1,000ℓ：2 基） - 水道栓：3 ケ所 - 配水パイプ総距離：7,900m - 増水量：180ℓ/日/世帯 - 灌水可能面積：750 m²

また、将来的に利用者自身で設備の修繕や修復をできるよう、配管に関するメンテナンス研修（2 日間）を開催し、5～7 区の住民 23 人（内女性 4 人）が参加した。なお、2017 年 6 月 23 日に水供給設備完成式典を開催し、在ネパール日本大使館國貞書記官はじめ、郡開発局長、郡水道局灌漑課チーフオフィサーならびに地域住民約 40 名が参加した。

(2) 農業用貯水設備の設置

本事業対象地の 3 区と 4 区で、農業用水（雨水や生活排水など）を貯めるプラスチックポンド（地面に穴を掘って防水シートで被う簡易貯水池）を設置した。対象となった 13 世帯の内、11 世帯では新設、残り 2 世帯では既存のプラスチックポンドの修繕を行った。これにより、乾期におけるカリフラワーやキャベツなど、水を多く必要とする野菜の栽培が可能になった。

	(3) 森林活用/水源保護研修 水利用委員会のメンバーなど約 50 世帯を対象に、水源保護に関するオリエンテーションを実施し、水量や水質を維持していくために、水源周辺に生活排水や汚水が混ざらないようにすること、土壌流出を防ぐ必要性等の啓発を実施した。 <u>活動 3：保健衛生啓発のための支援</u> (1) コミュニティ啓発活動 下痢などの水系感染症が多発する雨期に、本事業スタッフが本事業対象全世帯、および全教育施設（5 校）を訪問し、下痢予防に係る飲料水の処理等に関する啓発活動を行った。また乾期には、風邪や下痢などの疾病予防啓発活動の一環として「正しい手洗いワークショップ」を 2 回開催し、母親グループメンバー、学校教師ならびに就学児童ら 58 名が参加した。								
(3) 達成された成果	(1) 各活動を通じた効果及び成果指標における達成度 <table border="1" data-bbox="387 723 1473 1637"> <tr> <th data-bbox="387 723 614 757">活動</th><th data-bbox="614 723 1473 757">成果指標の達成度</th></tr> <tr> <td data-bbox="387 757 614 1234">1: 生計向上のための支援</td><td data-bbox="614 757 1473 1234"> ・ 農業研修対象 120 世帯の内、7 割（84 世帯）が研修で技術を習得した作物の栽培を継続する 【達成度：中程度】 対象農家の 96%以上が研修で技術を習得した作物を栽培した。3 回の栽培サイクルのいずれかに参加し、その後も栽培し続けている農家は 5 割（61 世帯）に留まったが、対象地域におけるモデル農家となるような篤農家も生まれている。 ・ 2 年次研修受講世帯（家畜飼育：50 世帯）の内、7 割（35 世帯）が受講内容に基づいた飼育活動を開始する 【達成度：低～中】 家畜飼育研修については、研修受講 48 世帯の 22%にあたる 11 世帯が改良小屋を設置した。目標数値の 7 割に満たなかった要因として、地震により住居を失い、家屋再建や生活基盤の復興が最優先となり、改良小屋の建設を含む本活動に労力や時間を割く余裕が十分なかったことが挙げられる。一方、改良小屋の設置には至らなかったものの、ぼかし肥料や液肥が普及したことから、家畜の糞尿を分けて収集するようになった農家が多く見られ、全体的に家畜の衛生環境改善につながったことは特筆に値する。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="387 1234 614 1447">2: 水へのアクセス改善のための支援</td><td data-bbox="614 1234 1473 1447"> 1 年次で支援した水供給システム（9 区：雨水貯水タンク、5・7 区：灌漑設備）が住民グループによって適切に維持・利用されている 【達成度：高】 1 年次に供与した雨水貯水タンクは、被供与世帯により維持管理され、本事業終了時点においても活用されている。5・7 区の灌漑設備は完成後、不具合等は特に発生しておらず、適切に維持・利用されている。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="387 1447 614 1637">3: 保健衛生啓発のための支援</td><td data-bbox="614 1447 1473 1637"> 対象地域小・中学校の児童・生徒の 60%以上が、感染症（下痢）の原因や個人衛生（歯磨き、手洗い等）の必要性について正しく理解している。 【達成度：高】 対象地域内の児童（3 年生以上）・生徒への聞き取り調査によると、その 80%以上が感染症の原因や個人衛生の必要性について正しく理解していることが確認された。 </td></tr> </table> (2) 事業目標の達成度 1. 生計向上研修対象世帯（120 世帯。現在、農作物を販売している世帯はない）のうち 5 割の世帯で収穫物の販売により現金収入を得、食糧確保（1 日 2 食、主食と副菜を摂取できる）が困難な期間が現状より減少する。 【達成度：高】 生計向上研修受講世帯の内、本事業期間中に収穫物を販売できた農家は 52 世帯（4.3 割）と、目標の 5 割にはわずかに達しなかった。しかしながら、同世帯すべてが本報告時点においても継続して換金作物を栽培していることから、「換金作物の栽培・販売で農業収入を得ること」が、本事業対象地で根付きつつあると言える。また、寒冷期や乾期でも農作物が収穫できるようになったことから、食糧供給が以	活動	成果指標の達成度	1: 生計向上のための支援	・ 農業研修対象 120 世帯の内、7 割（84 世帯）が研修で技術を習得した作物の栽培を継続する 【達成度：中程度】 対象農家の 96%以上が研修で技術を習得した作物を栽培した。3 回の栽培サイクルのいずれかに参加し、その後も栽培し続けている農家は 5 割（61 世帯）に留まったが、対象地域におけるモデル農家となるような篤農家も生まれている。 ・ 2 年次研修受講世帯（家畜飼育：50 世帯）の内、7 割（35 世帯）が受講内容に基づいた飼育活動を開始する 【達成度：低～中】 家畜飼育研修については、研修受講 48 世帯の 22%にあたる 11 世帯が改良小屋を設置した。目標数値の 7 割に満たなかった要因として、地震により住居を失い、家屋再建や生活基盤の復興が最優先となり、改良小屋の建設を含む本活動に労力や時間を割く余裕が十分なかったことが挙げられる。一方、改良小屋の設置には至らなかったものの、ぼかし肥料や液肥が普及したことから、家畜の糞尿を分けて収集するようになった農家が多く見られ、全体的に家畜の衛生環境改善につながったことは特筆に値する。	2: 水へのアクセス改善のための支援	1 年次で支援した水供給システム（9 区：雨水貯水タンク、5・7 区：灌漑設備）が住民グループによって適切に維持・利用されている 【達成度：高】 1 年次に供与した雨水貯水タンクは、被供与世帯により維持管理され、本事業終了時点においても活用されている。5・7 区の灌漑設備は完成後、不具合等は特に発生しておらず、適切に維持・利用されている。	3: 保健衛生啓発のための支援	対象地域小・中学校の児童・生徒の 60%以上が、感染症（下痢）の原因や個人衛生（歯磨き、手洗い等）の必要性について正しく理解している。 【達成度：高】 対象地域内の児童（3 年生以上）・生徒への聞き取り調査によると、その 80%以上が感染症の原因や個人衛生の必要性について正しく理解していることが確認された。
活動	成果指標の達成度								
1: 生計向上のための支援	・ 農業研修対象 120 世帯の内、7 割（84 世帯）が研修で技術を習得した作物の栽培を継続する 【達成度：中程度】 対象農家の 96%以上が研修で技術を習得した作物を栽培した。3 回の栽培サイクルのいずれかに参加し、その後も栽培し続けている農家は 5 割（61 世帯）に留まったが、対象地域におけるモデル農家となるような篤農家も生まれている。 ・ 2 年次研修受講世帯（家畜飼育：50 世帯）の内、7 割（35 世帯）が受講内容に基づいた飼育活動を開始する 【達成度：低～中】 家畜飼育研修については、研修受講 48 世帯の 22%にあたる 11 世帯が改良小屋を設置した。目標数値の 7 割に満たなかった要因として、地震により住居を失い、家屋再建や生活基盤の復興が最優先となり、改良小屋の建設を含む本活動に労力や時間を割く余裕が十分なかったことが挙げられる。一方、改良小屋の設置には至らなかったものの、ぼかし肥料や液肥が普及したことから、家畜の糞尿を分けて収集するようになった農家が多く見られ、全体的に家畜の衛生環境改善につながったことは特筆に値する。								
2: 水へのアクセス改善のための支援	1 年次で支援した水供給システム（9 区：雨水貯水タンク、5・7 区：灌漑設備）が住民グループによって適切に維持・利用されている 【達成度：高】 1 年次に供与した雨水貯水タンクは、被供与世帯により維持管理され、本事業終了時点においても活用されている。5・7 区の灌漑設備は完成後、不具合等は特に発生しておらず、適切に維持・利用されている。								
3: 保健衛生啓発のための支援	対象地域小・中学校の児童・生徒の 60%以上が、感染症（下痢）の原因や個人衛生（歯磨き、手洗い等）の必要性について正しく理解している。 【達成度：高】 対象地域内の児童（3 年生以上）・生徒への聞き取り調査によると、その 80%以上が感染症の原因や個人衛生の必要性について正しく理解していることが確認された。								

	前より安定してきている。 2. 6ヶ月以上の水不足に直面する世帯が76世帯（事業開始ベースラインに基づく）から38世帯以下に減少する。 【達成度：高】 本事業に加え、ネパール政府による灌漑事業も実施されたことから、全76世帯において水不足が解消された。本事業で設置した水供給設備は「6ヶ月以上の水不足に直面する」21世帯を含む122世帯に裨益し、聞き取り調査ではいずれの世帯からも「1日あたりの水量の増加した」「水汲みに行く回数が減った」「水不足に直面する期間が短くなった」等のコメントが寄せられた。特に3・4区では、プラスチックポンドの設置で、乾期も農作物栽培が可能になるなど、顕著な成果を確認できた。 3. 対象世帯の40%（事業開始ベースラインに基づく）から60%以上が、感染症の罹患原因や予防法について正しく理解し、過去2週間で下痢に罹患した住民の割合が3割減少する（事業開始時・終了時調査） 【達成度：中程度】 聞き取り調査によると、9割以上の世帯が感染症の罹患原因について理解していることが確認された一方、正しく手洗いができ、且つ必要時（トイレ使用后、調理前、食事前）に実際に手を洗っていると答えた人は全体の6割程度に留まった。また、対象地域を管轄する公的保健施設（ヘルスポスト）を、下痢疾患で受診した患者数を2015年11月（本事業1年次の中間期）と2017年11月（本事業終了後）で比較すると、前者が19名、後者が21名であり、下痢罹患患者数の減少には至らなかった。この背景には、知識が行動に繋がっていないことも要因のひとつとして考えられることから、行動変容につなげる取り組みについて今後の課題としたい。
（4）持続発展性	・ 本事業で指導した技術（ぼかし肥料、液肥）は費用対効果が高いことから、研修受講農家以外にも普及していることが確認されている。本事業終了後もフォローアップを続けることで、同技術が地域の農家に根付き、活用され続けていくことが期待される。 ・ ビニールハウスを設置した農家は、自らも設置に際して資金を投入していることから、高いオーナーシップが醸成されている。今後も、ビニールハウス技術を活用した換金作物栽培が継続されることが期待される。 ・ 本事業期間中に2組の農業グループが郡農業局に登録され、本報告時点でさらに1組が登録手続き中である。農業局に登録することで、政府補助金を得られたり、農業局職員からモニタリング指導を受けられたりするなど、本事業終了後も資金・技術面で持続的なサポートを受けることができる。 ・ 水利用委員会メンバーの協議により、①各世帯から毎月100ルピーを徴収すること、②管理人を雇用すること（月額1,800ルピーが支払われる）、③年1回水源及び各設備周辺の清掃活動を行うこと、などが決められた。 ・ 水供給設備建設に際しては、配管メンテナンス研修開催に加え、施工に従事した住民が特定の建設技術を習得しており、同住民らを中心に今後も地域で維持管理できる体制が整っている。